

中国少数民族の文化伝承をめぐる現状と課題

—内モンゴルのウランムチに着目して—

紅 桂 蘭¹

1. 問題の所在と研究の目的

中国は55の少数民族を公認し、各少数民族は多様な文化を有している。中国建国後に中国政府は少数民族文化の発展を推進する制度や政策を打ち出すとともに少数民族文化発展の支援策を講じ、民族の名跡・文物・文化遺産を守り、少数民族の文化を継承し発展させてきた。

本研究で着目する内モンゴル自治区のウランムチはその一つである。ウランムチは基層文化事業機関として、文化宣伝の形式をとりながら各地を巡回上演する芸術団体であり、民衆の文化要求を満足させてきた。ウランムチが結成されたときに作成された「ウランムチ工作条例（草案）」（1957年）では「ウランムチは遊牧の政治、経済の発展にあわせ、遊牧地域の民族的な特徴に基づいて、社会主義思想や党と政府の各政策、法令及び時事を宣伝し、牧畜民の政治的自覚を高める。また、牧畜地域の民衆文化事業を発展させ、牧畜民のアマチュア文化芸術活動を組織・指導し、民族自治区における社会主義的新民族文化の発展を促進する」と提示された。ここからウランムチは建国初期における中国共産党の政策や社会主義思想の宣伝工作という性格をもっている一方で、より積極的には少数民族地域にある固有の文化的伝統の保持と発展に取り組む根拠が与えられたとも考えられる。

しかし、近年では、漢族とモンゴル族が混住する内モンゴル自治区においては、グローバル化、市場経済化と漢文化の影響を受け、漢文化と民族文化の相互浸透があり、一方では民族文化の漢化、消失問題が生ずるとともに他方では、

新たな文化の創造が現れている。例えば、モンゴル族の生活様式は漢族と同じようになっており、都市部においては、モンゴル語を話せない、書けない、読めないモンゴル族が多くなっている。そして、内モンゴル東部地域においては、モンゴル東部方言の中でモンゴル語の方言と漢語の要素が混在した変容がみられている。この東部方言の変容については従来の東部地域のモンゴル方言と漢語の要素が混在し、学校教育を通じて入ってきた他のモンゴル語方言の要素も取り入れたハイブリット言語であるという指摘もある。

これまでの研究は、多くは現代中国における少数民族の変容（意識、言語、生活過程など）について解明したが、少数民族文化の消失に対する文化の保護と文化の伝承については触れてこなかった。

以上より、本研究では、中国の内モンゴル自治区を事例として、民族文化を保持、継承、発展させるために建設された基層文化事業機関であるウランムチに注目して、ウランムチが少数民族の文化伝承にどのような役割を果たしているのかを明らかにすることを目的とする。ここで言う民族文化とはウランムチが保持、継承、発展に取り組んできた文化であり、具体的にはモンゴル族の歌舞、安代、好来宝などを指している。上記に述べたように、ウランムチは政策の宣伝、普及という政治的な役割もあるが、本研究ではウランムチが民族文化伝承に果たす役割に注目して、ウランムチの活動の展開、活動の実態、社会的な評価などを考察することで、現代社会における民族文化の消失と民族文化の変容の問題点を明らかにし、少数民族文化の伝承の可能性をさぐることを目指す。

¹ 筑波大学大学院 博士前期課程2年

2. 論文の構成

序章 研究の目的と方法

第一章 少数民族文化振興政策の展開と内モンゴル自治区の現状

第1節 少数民族文化振興政策

第2節 ウランムチと少数民族文化伝承

第二章 ウランムチの歴史の変遷

第1節 ウランムチの草創期(1957年～1965年)

第2節 ウランムチの停止期(1966年～1977年)

第3節 ウランムチの回復期(1978年～1989年)

第4節 ウランムチの改革期(1990年～現在)

第三章 ウランムチによる文化活動の実態

第1節 ジャルト旗ウランムチの事例

第2節 クロン旗ウランムチの事例

第3節 カンキカウランムチの事例

第4節 ウランムチの活動に対する社会的評価

第四章 少数民族の文化伝承に対するウランムチの役割と問題

第1節 内モンゴルの文化伝承に対するウランムチの役割

第2節 ウランムチの存続と発展に関わる問題

終章 本研究のまとめと今後の課題

3. 論文の概要

第一章では、建国後の少数民族文化政策を整理し、少数民族文化芸術団体であるウランムチに着目する理由と意義について述べた。

第二章では、ウランムチの歴史の変遷を明らかにするため、ウランムチの歴史発展を四つに時期区分し、各時期におけるウランムチの役割の変化を明らかにした。

草創期においては、ウランムチは社会主義思想を宣伝するという役割をもつとともに、民族文化を普及する機能をもっていた。しかし、1965年から「ウランムチから学ぶ運動」の始まりにより、ウランムチの活動は政治の宣伝を中心におこなう傾向になった。

停止期においては、文化大革命(1966～1976年)の背景の中で、ウランムチは完全に政治宣伝の役割を担うようになり、民族文化を普及する機能を果たさなくなった。

回復期においては、文革の終息にともなって、

ウランムチの活動は回復し、ウランムチの機能は政治の宣伝の役割から民族文化の発展の役割に移行した。

改革期においては、ウランムチは民族文化の発展の役割をもつとともに、ウランムチによる民族文化の商品化が生じた。

第三章では、通遼市のジャルト旗ウランムチ、クロン旗ウランムチ、カンキカウランムチの事例を取り上げ、ウランムチによる文化活動の実態を考察するとともにウランムチの活動に対する社会的評価を検討した。

第1節と第3節を通じて、ウランムチの団員の意識の変化を明らかにした。ウランムチの元団員はウランムチの役割としては、民衆に奉仕し、基層レベルの上演を重視し、民衆の文化活動を活発にするという意識をもっている。ウランムチの活動は党の宣伝、文化の普及だけではなく、ウランムチの団員からみるウランムチは「文芸、民衆、奉仕」を結び合わせたものであり、文化によって民衆に奉仕することであるという意識の強さが見られた。しかし、現在の団員は、グローバル化、経済化の背景の中で、ウランムチの「文化と企業」の連携を強調し、文化と経済の両方利益を得ることを目的としていることがわかった。

第2節を通じて、1980年以降にウランムチは急速に回復する時期に入り、民族文化の発展が促進された。本節では、安代文化の変化を検討することにより、文化の担い手による民族文化の変容と商品化による民族文化の変容の相違点を明らかにした。安代は表現形態が変化したとしても、安代の本質、この中の安代的なものは変化してないと考え、現代の安代の変化は伝統安代の本質に基づいて創られ、安代のさまざまな形の変化は安代文化を普及する一つの手段であり、これは新しい文化の創造につながる可能性があると考えている。現代の安代の変化は新しい文化の創造ととらえ、商品化による民族文化との相違としては、伝統文化の本質があるかないかという点にあると考える。

第4節を通じて、ウランムチの活動に対する各時期における社会的評価を明らかにした。

第四章では、第三章までのウランムチの歴史、活動の実態などを分析することを通じて、民族文化伝承に対するウランムチの役割と問題を考察した。ウランムチが果たしている役割としては以下の5点がある。

①ウランムチは民族文化の担い手を養成している。②ウランムチは民衆に愛される民族特色があるプログラムを創作している。③ウランムチは民間文化遺産の整理をおこなうだけではなく、文化の伝承者を養成し、モンゴルの伝統文化を保護し、継承している。④ウランムチの上演は民衆に対して民族的アイデンティティの形成にも一定の役割を果たしている。⑤ウランムチの国外の上演は国際文化交流に貢献しているとともに、モンゴル文化を世界に広めている。

ウランムチが抱える問題としては、4点が指摘できる。

①ウランムチの活動は政治的影響を受けやすく、ウランムチの活動には不安定性がある。市場経済の導入により、民族文化は商品化し、民族文化の価値は変容している。③ウランムチの基層レベルへの上演が不足している。④ウランムチの人材養成、ウランムチの独自の創作の足りなさがあると考えられる。

4. 今後の課題

第一の課題は、地域の人たちのウランムチや

民族文化に対する意識が明らかではないことである。本研究では主にウランムチの団員の意識とウランムチの活動に着目した。しかし、地域の人たちのウランムチ、民族文化についての考え、意識について検討することができなかった。したがって、今後は地域の人たちやさまざまなモンゴル文化の担い手の民族文化に対する意識を明らかにする必要がある。

第二の課題は、新しい民族文化保護対策の展開である。内モンゴル自治区は現在ではさまざまな民族文化保護対策を行っている。そして、この中で一つ注目されるのは「民族文化大区」建設により、民族特色のある地域の建設に取り組んでいることである。このような地域づくりは民族学校に影響し、現代青少年に民族伝統文化を教える授業を行っている。今後、民族文化伝承を研究するため、民族学校教育や民族特色のある地域づくりについて把握する必要がある。

5. 主要参考文献

- 1) 内モンゴル自治区文化庁編『ウランムチの路』内モンゴル人民出版社、1997年。
- 2) 小川佳万『社会主義中国における少数民族教育—「民族平等」理念の展開』、東信堂、2000年。
- 3) ラシオス『ウランムチの緑葉』内モンゴル少年児童出版社、2006年。